吹田市立博物館
SUITA CITY MUSEUM
博物館だより
NO.91
Suihaku
2022.8

吹田市立博物館開館30周年記念

令和4年度（2022 年度）秋季特別展

神崎川展

―川港・吹田のものがたり―

令和４年（2022 年）9月23日（金・祝）~10月30日（日）

「吹田渡口」『摂津名所図会』（当館蔵）

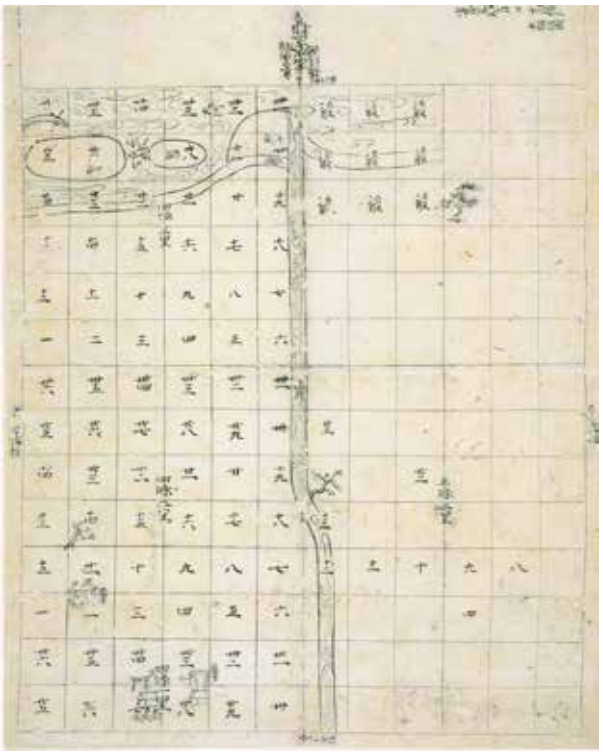
神崎川は淀川水系の一河川ですが、吹田にとっては水運の総元締めといっても過言ではありません。古くは三国川とよばれ、淀川とは別流でしたが、８世紀に両河川をむすぶ運河がつくられました。行基による次田（すきた）堀川の土木事業はそのはしりでした。運河の完成によって、西国と京都を結ぶより簡便な航路が開かれたのです。

他方、陸路としては西国街道が京都と西日本をつなぐ大動脈でした。その西国街道から大坂に向かう幹線のひとつが亀岡街道でした。その亀岡街道と神崎川が交わる地点に「吹田の渡」がおかれたのです。

本展示は、神崎川の水運に焦点を当てて吹田の通史を解題する試みです。本来、令和２年（2020年）の春季特別展として企画されましたが、コロナ禍で延期を余儀なくされました。あらためて仕切り直しをして、多くの方がたにご覧いただけることを願ってやみません。

（特別館長　中牧弘允）

資料紹介　摂津守護代官打渡状案



①【写真】摂津国垂水庄差図（複製）
原本は京都府立京都学・歴彩館所蔵

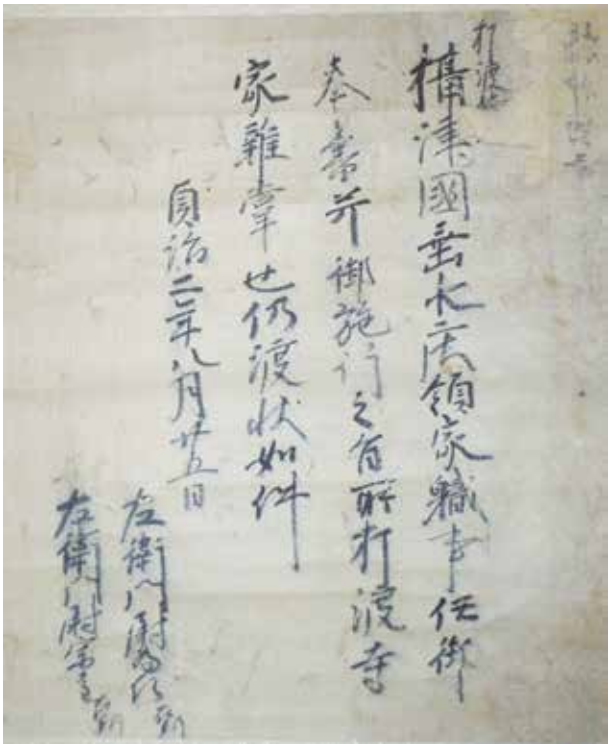
垂水庄は、平安時代から戦国時代まで東寺の重要な荘園として存続しました。上の絵図（①）は寛正4年（1463）に作成された垂水庄の絵図で当時の荘園の範囲を示しています。上部に三国川（現・神崎川）、中央に高川が描かれています。

垂水庄や西国の東寺領荘園の年貢は、三国川、淀川を利用して京の東寺まで運ばれたと考えられます。

当館では、垂水庄に関する古文書を購入しました。貞治2年（1363）8月25日付の「摂津守護代官打渡状案」（②）です。垂水庄に関する古文書は、京都府立京都学・歴彩館所蔵の国宝「東寺百合文書」、京都大学総合博物館所蔵の「教王護国寺文書」、東寺宝物館所蔵の「東寺文書」などがあります。いずれも東寺に伝来した古文書群です。さらに東寺執行職を相伝した阿刀家に伝わった「阿刀家伝世資料」（京都国立博物館所蔵）があります。②はこの阿刀家から出た資料と思われ、関連文書として「阿刀家伝世資料」には同日付の文書2点が確認できました（③・④）。③は内容が②と同文になっています。④は3つの文書を書き写したものであり、内容は貞治2年7月4日付「奉書案」（ａ）、貞治2年7月11日付「守護施行案」（ｂ）、②・③と同内容の「打渡状案」（ｃ）から成っています。つまり、貞治２年７月４日に室町幕府御教書案（④－ａ）、同年7月11日に摂津守護施行状案（④－ｂ）、同年8月25日に摂津守護代官打渡状案（②・③・④－ｃ）が出されたのでしょう。②と③は字配りに違いはありますが、正文を再現して写したもの、④は私たちがメモをとるように文書の内容を書き写したものとなっています。②は本紙が縦長ですが、本来は③と同じように横長の料紙に書かれていたものを、両端の余白を切って、掛け軸に仕立てたものと考えられます。

すでに『吹田市立博物館だより』No.16号、17号で紹介したように、芥河氏は垂水庄を押領した吹田三郎左衛門尉の濫妨を停止させ、芥河五郎左衛門尉貞継は文和3年（1354）在地を支配する下司職を与えられました。この下司職は一年を限り、年貢の半分を武士に与える半済と考えられますが、芥河五郎左衛門尉貞継はこれを根拠に吹田氏とともに垂水庄への侵入、押領を続けます。延文２年（1357）6月に、芥河・吹田両氏の不法行為を退けるよう命令がだされましたが、両氏は下地を渡さず、退去しませんでした。その後も荘園の諸権益である領家職を雑掌に沙汰させるよう命令が出されましたが、芥河氏らは従いませんでした。

④－ａの室町幕府御教書案は、室町将軍家から摂津守護赤松光範に出された文書です。芥河五郎左衛門尉が垂水庄に侵入し濫妨している、押領人は沙汰があるため参洛せよ、下地は雑掌に支配をさせるとの内容です。④－ｂの摂津守護施行状案は、垂水庄領家職は前の④－ａの御教書の写しを遣わすので、仰せの通りに芥河五郎左衛門尉の濫妨を退け、参洛させ、下地は雑掌に支配をさせるようにという内容になっています。摂津国守護赤松光範から守護代赤松範顕に出されたものです。最後の②・③・④－ｃの



②【写真】摂津守護代官打渡状案（当館所蔵）

摂津守護代官打渡状案は垂水庄の領家職は前の④－ａの御教書、④－ｂの施行状のとおりに、下地を寺家雑掌に打ち渡すとの内容になっています。摂津守護代官２名の名がありますが、一人目については、二文字目が明確ではありませんが、「信」かと思われます。（「東寺文書検索システム」では「伊」としていますが、ちがうように感じます。）

平成13年度特別展「東寺領垂水庄－悪党の時代－」で、東寺申状案（東寺百合文書テ函42-1）を展示しましたが、その中に「去七月四日被成御教書、同七月十一日有御遵行、八月廿五日被打渡下地於寺家雑掌畢」とあり、今回紹介した文書を指すと考えられます。いずれも案文で正文ではないことが残念ですが、東寺百合文書、教王護国寺文書、東寺文書にはなく、内容が確認できたことは貞治2年段階の芥河氏と東寺の動きが明確になったといえます。

芥河五郎左衛門尉貞継はいったんは下地を東寺側に打ち渡したようですが、その後も垂水庄内への侵入を繰り返し、先例を無視して祭事仏事の米を農民たちから徴収し、農民たちから訴えられています。芥河五郎左衛門尉貞継は応安3年（1370）ごろまで垂水庄への侵入を繰り返しました。今回の資料は、芥河五郎左衛門尉貞継の動きを示す貴重な資料です。

最後に、この資料の購入にあたって助言をいただいた上島有先生、東寺宝物館の新見康子氏、阿刀家文書についてご教示いただいた京都国立博物館の羽田聡氏に対し、感謝申し上げます。

＜参考文献＞
吹田市　『吹田市史』第1巻　1990年
吹田市　『吹田市史』第5巻　1978年
吹田市立博物館　『平成13年度特別展図録「東寺領垂水庄－悪党の時代－」』　2001年
東寺文書データベース作成委員会　『東寺文書検索システム』　2001年

（当館学芸員　池田直子）

③【翻刻】摂津守護代官打渡状案

（端裏書）「摂州垂水庄領家職事　貞治二年八月廿五日
（後筆）『天保二迄四百三年成』

打渡状案
摂津国垂水庄領家職事、
任御奉書并御施行之旨、
所打渡寺家雑掌也、仍渡状
如件、
貞治二年八月廿五日　左衛門尉為□在判
左衛門尉宗重在判

④【翻刻】摂津守護代官打渡状案（端裏書）

（端裏書）「武家御教書等案」

御教書
奉書案
　・・・（a）
東寺雑掌頼憲申摂津国垂水庄領家職事、重申
状遣之、芥河五郎左衛門尉立還遵行之地致濫妨云々事、
実者招重科歟、所詮於押領人者、為有其沙汰可参洛之
旨相触之、至下地者、不日沙汰付雑掌可執進請取、更不可
有遅滞之状、如件、
貞治二年七月四日　御判
赤松大夫判官殿

守護施行案
東寺雑掌頼憲申摂津国垂水庄領家職事、今年七
月四日御教書副解状如此案文遣之、早任被仰下之旨、遣使
者、退芥河五郎左衛門尉濫妨、且相触参洛之儀、沙汰
付雑掌於下地、可被執進請取之状、如件、
貞治二年七月十一日　左衛門少尉在判
赤松彦五郎殿
　・・・（b）

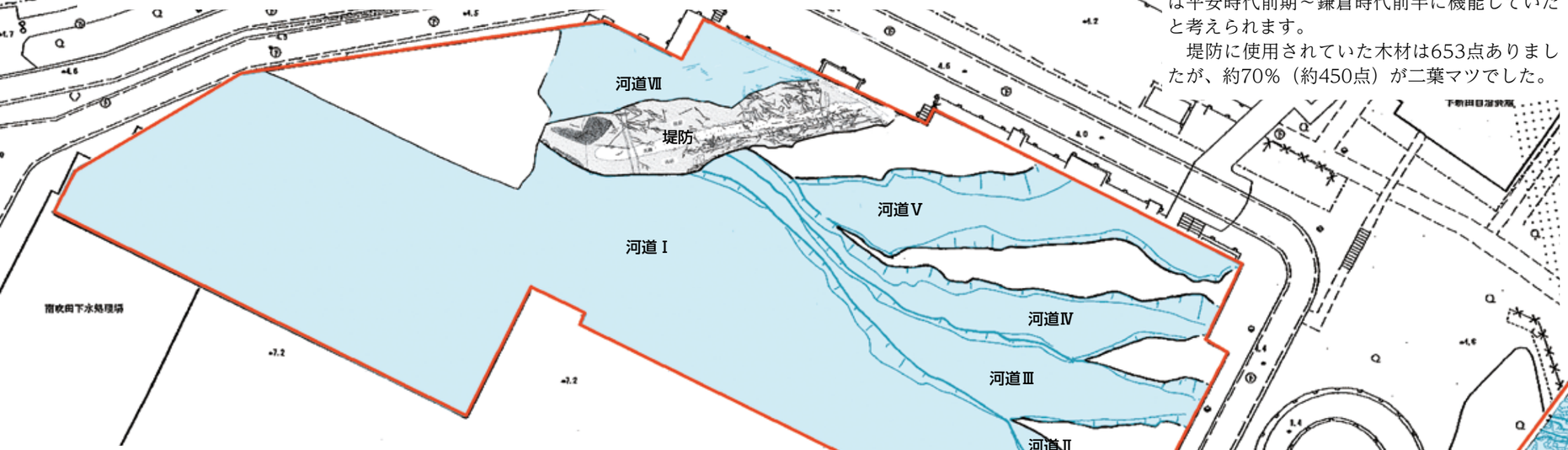
打渡状案
摂津国垂水庄領家職事、任御教書并御施行之
旨、所打渡寺家雑掌也、仍渡状如件、
貞治二年八月廿五日
左衛門尉為□在判
左衛門尉宗重在判
　・・・（c）

古代の神崎川－五反島遺跡の発掘調査から－

五反島遺跡は、吹田市南吹田５丁目、大阪市との市境になっている神崎川の右岸にある遺跡です。ここは神崎川の自然堤防が埋め立てられたところであり、もともとの河川敷に位置しています。

昭和61年（1986）に南吹田下水処理場の拡張工事に伴って、初めて発掘調査が行われました。このときの調査において、かつての神崎川の流路跡（河道跡）と堤防跡が検出され、川底から弥生時代から中世の遺物が大量に出土しました。

さらに平成23年（2011）には第2次・第3次調査が行われ、第1次調査で見つかった川筋の東側の川底を検出しました。遺物は第1次調査と同様に弥生時代から中世のものがありますが、7～8世紀の須恵器や瓦が大量に出土しています。



第１次調査区全景（西から）

木柱（河道Ⅳ）

古代の神崎川跡

地下4.5m付近から古墳時代の流路１条（河道Ⅴ）と平安時代以降の流路６条である河道Ⅰ～Ⅳ・Ⅵ・Ⅶ（河道Ⅵは中世のため図示していません。）が見つかりました。いずれも、現在の神崎川と同様に東から西へ流れていたようです。

河道Ⅴは幅12m、深さ0.5m、両岸には平坦面がありました。河道Ⅳ～Ⅰは神崎川のかつての流路の一部と思われる川筋です。その中で河道Ⅳが最も古く、平安時代初頭には流れていたようです。岸際には径20㎝の木柱が埋められており、橋あるいは桟橋の脚柱と考えられます。

その後鎌倉時代にかけて河道Ⅳ→Ⅲ→Ⅱ→Ⅰと河岸が南下していきます。河道Ⅰの川底は極めて平坦で、大きな流れでした。左岸は検出されていないことから川幅は少なくとも30m以上になります。河道Ⅰが流れていたときには河道Ⅳ～Ⅱは河川敷になっていたと思われます。

河道Ⅶは堤防の北側を北東から南西に流れ、幅は8.5m以上で川底は河道Ⅳ～Ⅰに比べて高い位置にあります。現在の糸田川のように千里丘陵から流れ出る、神崎川とは別水系の小河川です。

堤防跡

南側の河道Ⅳ～Ⅰと北側の河道Ⅶが合流するところに築かれた「瀬割堤」です。堤防先端が尖り、長さは60m、高さは南側で0.6m、北側で1.6m、堤防最下部の幅は9～16mあります。堤防は自然堆積した高まりを利用して築かれ、堤防最上部には約2mの平坦面に3～4列の杭を打ち、斜面（法面）は杭に横木を組み合わせ、さらに小枝や小材を絡ませていました。先端部には樹葉と粘土を重ね合わせ堤防を覆った痕跡もありました。

堤防の下層には7世紀の遺物層があり、堤防斜面には平安時代前期の甕を埋めてありました。また、堤防を埋めていた土層には鎌倉時代後半の瓦器が含まれていたことから、この堤防は平安時代前期～鎌倉時代前半に機能していたと考えられます。

堤防に使用されていた木材は653点ありましたが、約70％（約450点）が二葉マツでした。

堤防跡断面

堤防跡断面

堤防跡斜面（北側）

堤防使用材の樹種

二葉マツ(36)、ヤナギ属(25)、ヒノキ(18)、ムクノキ(14)、カシ類(12)、エノキ(12)、モミ(8)、カエデ属(8)、ナラ類(7)、クヌギ類(6)、ハコヤナギ属(5)、スギ(4)、ツブラジイ(4)、サカキ(4)、クマシデ属(3)、イヌマキ(2)、ケヤキ(2)、アキニレ(2)、ヤマグワ(2)、クスノキ(2)、ヒサカキ(2)、イスノキ(2)、トチノキ(2)、トネリコ属(2)、カヤ(1)、クリ(1)、シキミ(1)、カマツカ(1)、サイカチ(1)、シラキ(1)、ニガキ(1)、ヤマウルシ(1)、ムクロジ(1)、アキグミ(1)、カキノキ(1)、ハイノキ(1)

＊堤防使用材のうち196点の顕微鏡観察を実施しました。事前の肉眼観察で明らかに二葉マツと認められた木材は除外しています。(　)内は検出件数。

第３次調査区検出の川床面

現在の地表下６～７m付近で川床面を検出し、この調査地は第１次調査で見つかった川筋の東側の川底にあたると思われます。川床には幾筋もの起伏がみられ、いくつかの流路を示すのか、大雨・洪水による水流で形成されたものと考えられます。

川床には水流に直交して杭5本が列上に打ちこまれていました。長さ1mほどで橋あるいは桟橋の脚柱の可能性があります。

杭の検出状況

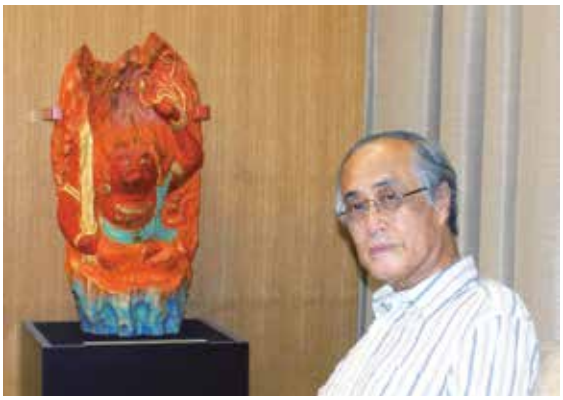
特別館長インタビュー⑲

関西大学名誉教授･きょうと視覚文化振興財団理事

中谷　伸生さん

聞き手：中牧弘允

令和4年（2022年）6月29日、関西大学名誉教授・きょうと視覚文化振興財団理事の中谷伸生先生に、近世の大坂画壇などについてお話をうかがいました。



中谷伸生（なかたにのぶお）

関西大学大学院文学研究科哲学専攻（美学美術史）博士後期課程単位取得後退学。
三重県立美術館学芸課長、関西大学文学部教授を歴任。
現在は関西大学名誉教授、きょうと視覚文化振興財団理事。
著書に『大坂画壇はなぜ忘れられたのか ── 岡倉天心から東アジア美術史の構想へ ──』（醍醐書房、2010年）がある。

中牧：秋季特別展は神崎川がテーマです。２年前、令和２年度（2020年度）の春季特別展として開催予定でしたが、新型コロナウィルスの影響で延期になり、リベンジを図ります。

中谷：そうでしたね。

中牧：関西大学図書館からお借りする大岡春卜（おおおかしゅんぼく）の《浪花及澱川沿岸名勝図巻》は展覧会の一つの目玉となる作品だと思います。お借りするにあたり、中谷先生にはご協力いただきました。改めてお礼申し上げます。作品について教えていただけませんか。

中谷：淀川水系を描いた絵画としては、今確認されているなかではこの作品が最も古い時代のものと思います。この作品の後、円山応挙、さらに伊藤若冲の《乗輿舟（じょうきょうしゅう）》といった淀川を描いた作品が出てきます。ですので、先行作品として非常に重要です。

大岡春卜は非常に重要な人ですが、この人物の紹介が著しく遅れています。今では「若冲の先生」として注目されたりしますが、その視点だけでは非常に残念です。

中牧：忘れ去られた、知られざる大坂画壇の人物ですね。大坂画壇の関連で言えば、神崎川展では金子雪操の《蘭亭曲水図》も展示します。絵のなかでみんなが酔っぱらって楽しんでいるところが私は好きですね。

中谷：王義之の蘭亭での遊びを描いた図は日本でとても流行りました。たくさん描かれまして、次第に日本化していきます。江戸時代の初期ごろに狩野山雪が描いた蘭亭曲水図は屏風に合わせた横の構図で川幅を狭く描いています。ところが、掛軸に描くようになると川幅が広くなる。川岸に座って流れてくる盃を受け取る遊びですから、本来は川幅が狭いはずです。だんだんと概念化していったとも言えます。

中牧：そうなんですか。先生には展覧会の関連イベントでご講演もお願いしています。

中谷：神崎川を描く作品はあまり見ませんが、《浪花及澱川沿岸名勝図巻》のように淀川を描く文化はあります。神崎川に絞り込んだ講演は難しいと思いましたが、広く淀川の淀あたりから大坂までの周辺地域の文化ととらえてお話するつもりです。

◆

中牧：中谷先生は令和4年（2022年）春頃に開催していた京都国立近代美術館の「サロン！雅と俗－京の大家と知られざる大坂画壇」にも関わっていらっしゃいましたね。近年、大坂画壇をテーマにした展覧会が増えてきたように思います。

中谷：これまで大坂画壇はあまりにも除外され過ぎてきたと感じています。そもそも、大阪歴史博物館で木村兼葭堂（きむらけんかどう）の展覧会が開催されたのが平成15年（2002年）です（「没後200年記念 木村兼葭堂－なにわ 知の巨人－」）。20年前に初めて大きな展覧会があったわけです。「大阪は文化が栄えないところ」と言う人もいますが、そう思われても仕方がない状態

です。大阪の文化そのものを軽視しすぎではないでしょうか。実は、大阪のことが分からなければ、京都のことは分かりません。全部繋がっています。学問として大問題です。

中牧：そうですね。

中谷：昭和56年（1981年）、もう半世紀近く前のことになりますが、大阪大学の武田恒夫先生が『近世の大坂画壇』という展覧会を指揮されて、大阪市立美術館で開催しました。それがほとんど初めてと言える大きな大坂画壇の展覧会でした。大阪歴史博物館の木村蒹葭堂の展覧会は、それからずいぶん時間が経っています。

中牧：研究者の数が少ないのではないでしょうか。

中谷：その問題はありますね。さらに言えば、東京で大坂を扱う研究者はほんとうに少ないです。京都を研究する研究者は東京でもあれほど多いのにも関わらずです。東京から、「大坂は入りにくい感じがする」という声も聞きます。

中牧：大坂は、本当は文化都市です。でも「商都」というレッテルを関東から貼られてしまいました。その影響も大きいようです。

中谷：大坂は「金儲け」というイメージを持たれてしまっていますね。確かに「商都」というイメージが強く、そこで発生したはずの文化が忘れられてきたということは大きな問題です。文化のうち美術、特に絵画の研究では、岡倉天心の日本美術史論が大きな影響を与えていますが、天心は大坂の絵画についてほとんど触れていません。唯一、大坂の絵師としては森徹山の名前だけが出てきます。森徹山が円山応挙の弟子だからというだけの理由ですから、実質的にはゼロに等しいです。その影響で大坂は研究の空白地域になってしまっています。ですが、言い換えれば、最後に残された大きな未開拓の領域です。しかも画家の数、作品の数も驚くべき数があります。

中牧：そうですね。江戸時代、庄屋さんなどの階級の人たちが作品を数多く持っていたのですよね。

中谷：そうです。吹田市立博物館の近くでは中西家がありますね。中西家は淀藩と関係があり、京都画壇と大坂画壇とが混ざり合った中間的な特徴がコレクションにも現れています。中西家のコレクションだけでも、京都と大坂の交流がよくわかります。そんな重要性が研究ですっぽり抜け落ちているわけですから、問題ですよね。

中牧：吹田市立博物館に在職するようになり、はじめて中西家のコレクションなどを知り、文化の交流、サロン的な交流というものが京都と大坂を繋ぐこの吹田の地で行われていてたことに驚きました。先生は中西家の調査も長くされていましたね。

中谷：私も驚きました。４年くらい前、スイスのチューリヒ大学で長沢芦雪について発表してほしいと言われて赴いたことがあります。発表にあたって調べるなか分かってきたのは、芦雪は大坂との関係が深く、特に中西家がある吹田の岸部と八尾（の高安）は淀藩の大坂での拠点であり、淀藩の財源の多くを担っていました。そういうこともこれまで全く研究では出ておりません。

京都国立近代美術館で行われた展覧会「サロン！雅と俗－京の大家と知られざる大坂画壇」の図録に牲川充信（にえかわみつのぶ）という画家を挙げておりまして、そこに中西家のことを書きました。

中牧：そうなんですか。

中谷：中西家に牲川の襖絵があるのですが、あれはとても珍しいものですね。ほとんど牲川の作品を見たことがありませんでしたが、中西家にあったので驚きました。

中牧：その展覧会では大英博物館の大坂画壇コレクションが数多く紹介されていましたね。

中谷：そうです。特に良い作品が国外に出てしまっていますね。大阪が大事にしないのなら、ほかで大事にしてもらえるならありがたいことですが、少し大阪としては情けないですよね。

中牧：今後、吹田市立博物館でも大坂画壇を取り上げていく予定です。ささやかな抵抗を試みようとしております。

中谷：展覧会を繰り返し行って紹介していかなければ、目で見たことがないと評価へつながっていきません。期待しています。

中牧：本日はありがとうございました。

吹田市立博物館開館30周年記念　令和4年度（2022年度）秋季特別展
「神崎川展－川港・吹田のものがたり－」　関連イベント

講演会

●定員／40名、要申込。多数抽選。
参加費／無料

場所／２階 講座室

①9月23日（金・祝）　午後2時～3時30分
「江戸幕府の上方治水システムと神崎川」
●講師／村田 路人氏（神戸女子大学文学部教授）
●申込〆切／9月13日（火）必着

②10月1日（土）　午後2時～3時30分
「摂津地域の渡来文化とその故郷」
●講師／寺井 誠氏（大阪歴史博物館学芸員）
●申込〆切／9月20日（火）必着

③10月8日（土）　午後2時～3時30分
「淀川往来・大坂と京の画家たち」
●講師／中谷 伸生氏
（関西大学名誉教授・きょうと視覚文化振興財団理事）
●申込〆切／9月27日（火）必着

④10月15日（土）　午後2時～3時30分
「神崎川の開削と河尻の発展」
●講師／楞野 一裕氏（尼崎市立歴史博物館学芸員）
●申込〆切／10月4日（火）必着

⑤10月22日（土）　午後2時～3時30分
「明治の淀川改修と神崎川」
●講師／大澤 研一氏（大阪歴史博物館館長）
●申込〆切／10月11日（火）必着

展示解説

●定員／15名、要申込。多数抽選。
参加費／観覧料が必要。

場所／３階 特別展示室

①10月9日（日）　午後2時～3時
展示解説（考古・民俗編）
●解　　説／高橋 真希（当館館長）
藤井 裕之（当館学芸員）
●申込〆切／9月27日（火）必着

②10月23日（日）　午後2時～3時
展示解説（歴史・美術編）
●解　　説／中牧 弘允（当館特別館長）
池田 直子（当館副館長）
河島 明子（当館学芸員）
●申込〆切／10月11日（火）必着

ギャラリートーク

●定員／15名、要申込、多数抽選。
参加費／無料。観覧料が必要。

場所／３階 特別展示室

10月30日（日）　午後2時～3時
●講師／中牧 弘允（当館特別館長）
●申込〆切／10月18日（火）必着

史跡見学会

●定員／30名、要申込、多数抽選。
参加費／無料。交通費等実費が必要。

10月29日（土）　午後1時～4時
「神崎川河口沿いの史跡探訪」
●案　　内／楞野 一裕氏
（尼崎市立歴史博物館学芸員）
●集合場所／JR尼崎駅
●解散場所／尼崎市立歴史博物館
●ルート／神崎渡し跡、神崎橋、寺江亭跡、
大物主神社、尼崎市立歴史博物館 等
●申込〆切／10月18日（火）必着

申込方法

はがきかファックスにイベント名・日時・参加者全員の郵便番号・住所・名前（ふりがな）・電話番号を書いて博物館へ。吹田市役所ホームページの電子申込システム（9月1日～）からも応募できます。

【交通案内】（当館ホームページもご参照ください。）
●JR岸辺駅下車北口から徒歩20分
●JR吹田駅北口・阪急吹田駅から
千里中央ゆきバス4系統「紫金山公園前」下車徒歩5分
五月が丘南ゆきバス（循環）「五月が丘西」下車徒歩7分
桃山台駅前ゆきバス「佐井寺北」下車徒歩10分
●阪急南千里駅から
「JR吹田」ゆきバス「佐井寺北」下車徒歩10分。
●北大阪急行千里中央駅・阪急山田駅から
JR吹田ゆきバス4系統「紫金山公園前」下車徒歩5分
JR吹田ゆきバス12系統「岸部」下車徒歩10分
●お車の場合は、五月が丘方面からお回りください。
（吉志部神社側からは車は進入できません。）

吹田市立博物館だより　第91号　令和4年（2022年）8月23日発行
編集・発行／吹田市立博物館
〒564－0001　吹田市岸部北４丁目10番１号　TEL 06（6338）5500　FAX 06（6338）9886　ホームページ http://www2.suita.ed.jp/hak/

リサイクル適性Ⓐ
この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。
VEGETABLE OIL INK
この冊子は2,500部作成し、1部あたりの単価は26円です。
森林認証紙と植物油インキを使用しています。